あしたばん

2012年
（平成24年）
8月9日
木曜日

あしたばん編集部
発行所：加藤文俊研究室
info@ashitaban.net
http://ashitaban.net/

第二十六号

三宅島大学を考える手引き

―ガイダンス講座開催―

八月五日、三宅島大学本校舎にて「三宅島大学」ガイダンス（入学説明会）が行われた。この講座は、三宅島大学の概要を説明するとともに、これまでの活動、現在進行中の活動の紹介など、改めて三宅島大学を考えるひとつのきっかけとすることを目的としている。

まず、猪股春香さんから今年の三宅島大学の講座の流れの説明が行われた。今年は既に講座日程が決まっており、八月四日～十一月十八日の隔週週末に八回開講される予定だ。基本的に土日に開講され、「海」「山」「人」をテーマとして、各講座が組み立てられていく。ぜひスケジュールを確認していただき、一つでも多くの講座を受講していただきたい。

私からは、本紙『あしたばん』、民宿の女将さんのポスター制作についての紹介をさせていただいた。私たちは、三宅島滞在をとおして、見て、聞いて、感じたことを素直な思いで発信しつづけてきた。『あしたばん』やポスターを制作することによって生まれた島民の方とのつながりや、島民側が改めて島を知るきっかけとなったこと、といったこれまでの活動紹介をおこなった。

また、インターネットを介したビデオ通話を利用して、慶應義塾大学の加藤文俊教授にも参加していただいた。加藤先生からは、十八日から始まるキッズリサーチについてお話していただいた。キッズリサーチでは、午前中に学校の勉強を教え、午後は子どもと一緒になって島を知り、世界を知り、時には子どもたちが先生となる。子どもを通じて、島を知るのだ。決して一方的な関係ではなく、互いの学びの場となる講座を行っていく。

最後は『三宅島在住アトレウス家』について、長島確さんからの紹介が行われた。『アトレウス家』とは、ギリシャ悲劇に登場する家族の物語を借りながら、その家族を通じて家やまちを見つめ、住まいや暮らしを考えるプロジェクト…らしい。ここで「らしい」と書いてしまうのは、彼らが何者なのか私の中でまだ整理ができていないからだ。演劇でもなく、ワークショップでもない、けれど「何か」を表現し続けている彼ら。そんな彼らは今回、三宅島とほぼ同面積である山手線、この二つを重ね合わせた地図を製作し、公演に向けてのリサーチを行っている。三宅島と山手線。異なる二つの場所を重ね合わせてみると、大学本校舎は代官山エリア、村役場は渋谷区役所にほど近く、三池港は東京駅付近…と、場所同士がゆるやかなつながりを思わせてくれる。その感覚が不思議で、面白くて、山手線を知っていればいるほど、島を知っていればいるほど、自分の中にある地図が刺激されていくだろう。

これまでの活動を島民の方々に改めて話す。あるようでなかった機会に、自分自身で考え、三宅島大学を考え、それを島民の方々に話すということはとても貴重な機会をもらえた講座だった。

（上地　里佳）

夏の若おかみへ

「いってらっしゃ～い」「おかえりなさ～い」

何気ない一言だけれど、そう言って玄関先で見送ってもらえると嬉しい。そう言って私たちを見送ってくれるのは、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）の常駐マネージャー、猪股春香さんだ。三宅島には七月初旬に来たばかりで、滞在してから約一ヶ月が経とうとしている。三宅島大学のアートコーディネーターとして講座の組み立てや進行をおこなっており、島民の方々や施設利用者からは、「はるちゃん」や「おかみ」という愛称で親しまれている。私も、「はるちゃん」と呼ばせてもらっているひとりだ。今回は、若おかみ「はるちゃん」を取材させていただいた。

私が初めてはるちゃんに会ったのは、神着地区で行われた『牛頭天王祭』の前日、本校舎にふらっと立ち寄ったときのことだ。やわらかい関西弁に、めいいっぱいの笑顔で話をするはるちゃんに、こちらも自然と緊張がほどける。三宅島に来る前にはルーマニアに滞在しており、帰国してすぐ三宅島にやって来たというフットワークの軽さには脱帽である。初めて三宅島に降り立った朝、「とうとう来てしまった」という不安な思いもあったが、目の前にそびえる雄山、ところどころ枯れてしまっている木々、プレートをかかげた民宿の方々の朝迎え、これまで知っていた島とは異なる光景が広がる三宅島は、なにもかもが新鮮で、驚きに満ちていたという。今では多くの島民の方々から声をかけられたり、お裾分けをもらったり、地域での活動に積極的に参加したりしているところからは、三宅島での生活が充実したものであることが伝わってくる。

「人間がすごく好き」、というはるちゃん。誰にでも、どんなことにでも興味を持ち、真摯に聴き、素直に聞くのだ。それが心地よくて、いつの間にかはるちゃんファンになっている人は少なくない。「三宅島大学をとおして、大学時代にできる友人のような関係性を築いていきたい」と言うはるちゃん。今後どのような三宅島大学生活を送っていくのか、これからとても楽しみだ。

（上地　里佳）

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています。

おすそわけの三宅島茄子でお料理

まるくぎっしりとして、重みのある茄子が十本以上。濃い緑色のおおきなゴーヤ、これも十本。たまねぎ、きゅうり、キムチ…。八月七日、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）に到着した朝、台所にたったわたしは驚いた。前回ここに来た時はがらんとしていた冷蔵庫に、たくさんの食材が並んでいた。こんなに充実していたっけ。

先に到着していた上地、管理人の猪俣さんに聴いてみると、「これは○○さんから…」「こっちは■■さんからで…」とおすそわけしていただいたものだとわかる。これまでも滞在中に何度も食材をいただく機会があったのだけれど、この冷蔵庫の充実度はすごい。食材を見ていて、いただいた方の顔が思い浮かぶ。

わたし自身は東京生まれ東京育ち。近所の方とものやりとりをしていたことはあったけれど、「田舎からたくさん送ってもらったから！」と林檎や桃などの、果物をお裾分けし合うようなことしかなかった。おすそわけはこういうもの、とどこかで思っている節があったのかもしれない。こんなにたくさん食材をいただくことに驚きながら、素直にとてもうれしいと思った。

さて、と両手に茄子とゴーヤを手に取り考える。たくさんあるので、いろんな料理で食べられたほうがいい。そうだ、浅漬けにしよう。ゴーヤを漬けたことはなかったけれど、めんつゆがあったので、どうにかなりそうだ。

夕飯までに浅漬けを漬けて冷やしたかったので、夕方に北川商店へ。「塩昆布ありますか？」と声をかけると、商店のおかあさんがわたしを覚えていてくれた。「今日は何をつくりますか～？」と笑顔で応えてくれる。茄子ときゅうりがたくさんあるから、浅漬けにしようと思っていると伝えると、「塩昆布で？」となんだか不思議そうな表情。浅漬けに塩昆布はわりとスタンダードだと思っていたので、こちらも不思議な気持ちになる。「三宅島の茄子は焼き茄子が一番おいしいのよ、生姜と一緒に」と教えていただく。なるほど、茄子の食べ方は三宅島ならではのものがあるんだと納得した。当たり前のことではあるけれど、長期で滞在しながら自炊をしていないと、わからないことがたくさんある。「三宅島の茄子は焼き茄子」の定番は、たくさん茄子を差し入れていただいたこの機会じゃなかったら知ることはなかったかもしれない。つくったものを、今度はお裾分けしよう。そしてこんなふうに少しずつ、三宅島の定番に触れてゆきたい。

（大西　未希）

『つぶやき便』を見ていてつぶやく

あしたばん編集部員、上地が修士研究のプロジェクトとして『築穴パン屋のつぶやき便』をはじめている（詳細は『あしたばん』二十五号参照）。朝シール貼りの準備にでかけ、夕方商品がならぶ商店をまわり残数を確認しに行くというルーティーンを繰り返す上地を間近で見て、同時に三宅島内の「つぶやき便」の浸透も見ている。

八月七日は一日で二名、シールを集めてバックの引き換えに三宅島大学本校舎を訪れる方がいた。一日に開始しているので、毎日ひとつか、それ以上「つぶやき便」のシールつきパンを購入されている計算。このスピード感に驚いてしまう。

つぶやき便の内容も、バックと引き換えの際の話題になっていた。何年前かの今日、何があったか…は自然と話の種になる。ちょうど今ごろは冨賀神社大祭のある日で、私自身も去年のことを懐かしんだ。築穴バックを持った人のまわりでは、「つぶやき便」の話題になるのだろうか。「つぶやき便」がまた次のコミュニケーションを生むようにみえて、とても楽しみだ。

（大西　未希）

『つぶやき便』を6枚集めてもらおう！

特製オリジナルバッグもらえる！

※『あしたばん』を切らずに三宅島大学本校舎までご持参ください。
賞品の数に限りがあります。ご了承ください。

氏名：　　電話番号：

住所：

『つぶやき便』詳細はコチラ！

【応募方法】

『つぶやき便』の消印部分の六枚分を一口として、右記の応募用紙に貼り、三宅島大学本校舎（御蔵島会館）までお持ちください。賞品と引き換え致します。留守の場合は、記載している連絡先までご連絡ください。

【注意事項】

●賞品は数に限りがあります。
●担当者不在の場合は、後日ご連絡させていただきますので、連絡先のご記入をお願いします。
●賞品のデザイン・仕様等は、変更になる場合がございます
●一回目のご応募の方から優先的に賞品をお渡ししています。あらかじめご了承ください。
●賞品引き換えの際に、十～十五分程度のインタビューを予定しております。

三宅島大学は、東京文化発信プロジェクトの東京アートポイント計画事業として実施されます。